



主要目次

- PART I 資本主義に何が起きているのか
 第1章 「停滞」する世界経済
 第2章 資本主義 対 民主主義？
- PART II デジタル資本主義の登場
 第3章 捉えきれない消費者余剰の増大
 第4章 所有からアクセスへ——シェアリング・エコノミーの登場
 第5章 デジタルで変化する経済の課題
 第6章 私有財から公共財・準公共財へ
 第7章 デジタル資本主義の第3フェーズへの道
- PART III デジタル資本主義の多様性とその未来
 第8章 デジタルを世界史のなかに位置づける
 第9章 デジタル社会の多様性
 第10章 資本主義のゆくえ

『デジタル資本主義』

著者：此本 臣吾（監修）、森 健、日戸 浩之（著）

出版社：東洋経済新報社

発行年月日：2018年4月20日

「ここが読みどころ」～筆者からのメッセージ

足下の世界経済が低迷している一方で、NRIが3年に1度実施している生活者アンケートでは、自分自身の生活水準を「上」「中の上」「中の中」と評価する人の比率が徐々に高まっています。このギャップの要因は何か。本書では、デジタル化の進展によってGDPという経済指標がピンボケを引き起こしていること、その代わりに存在感を増しているのが、価格と支払意思額の差である「消費者余剰」、つまりお買い得感や利便性向上だと考えています。

本書では、資本主義システムが「デジタル資本主義」とでも呼べる段階に移行していると考えています。そこでは「労働」がロボットやAIに代替されつつあるのと同時に、人間の「活動」が経済を動かす新たな原動力になります。デジタル資本主義のもとで成功する企業には、ドラッカーが呼ぶところの「知識生産性」を高めることが求められます。人間や機械の活動情報をインプットにして、顧客の満足度（支払意思額）を高めるようカスタマイズされたアウトプットを出すことが求められるのです。

本書は、デジタルがもたらす数百年に1度とも言えるパラダイムシフトの具体的な姿やデジタル時代の企業経営について、読者の皆様に何かしらの気づきを得ていただけるものだと確信しています。



主要目次

- 第1章 マイナンバー制度本格化がもたらす変革
 第2章 マイナンバー制度で知っておくべき基礎事項
 第3章 マイナンバー制度の金融業務への影響
 第4章 顧客が抱く疑問・質問への対応策

『マイナンバー利用本格化で変わる金融取引』

著者：梅屋 真一郎

出版社：銀行研修社

発行年月日：2018年1月31日

「ここが読みどころ」～筆者からのメッセージ

マイナンバー制度がスタートして2年、2018年1月からは懸案であった預貯金へのマイナンバー付番が開始されました。本書は、金融商品におけるマイナンバー制度への対応、特に預貯金へのマイナンバーの付番とその影響を中心に紹介します。

他の金融商品と比べて預貯金口座は、総口座数も数億と極めて多く、かつ実質的に金融機関のすべての顧客が保有する商品です。

当面は付番は任意ですが、制度開始3年後をめどに義務化される予定です。しかし残念ながら、預貯金へのマイナンバー付番に関して公開されている情報は必ずしも多くありません。

そこで本書では、公開されている各種情報と従来からの議論を基に、本部担当者・営業店の責任者・営業店担当者等、様々な立場の職員の方が具体的にどのような事務対応を行うべきかをまとめました。

マイナンバー制度は、今後も幅広い分野に利用が広がり、行政に関わる手続きの分野では、何らかの形で必ずマイナンバーが関わってくる世の中になります。その中で、金融機関にとっては、預貯金が対象となることでマイナンバーの取り扱いは今まで以上に身近かつ重要になります。

本書は今まで多くのマイナンバー関連書籍を書いてきた集大成として執筆しました。



『金融政策の全論点：日銀審議委員5年間の記録』

著者：木内 登英 出版社：東洋経済新報社
発行年月日：2018年2月16日



「ここが読みどころ」～筆者からのメッセージ

これまで5年間の黒田体制下では、「日本銀行は政府の言いなり」といった批判がしばしば聞かれました。今年4月には日本銀行法改正から20年を迎えます。改正の最大の目的は日本銀行の独立性を高めることでしたが、20年が経過した今でも、それは達成されていません。その理由の一つは、日本銀行の独立性が経済、国民生活の安定にとってなぜ重要であるかについて、十分に議論が深められなかったことにあります。また日本銀行法改正では、物価の安定が日本銀行の使命と初めて明記されました。物価の安定は、本来中間目標であって、最終目標は国民生活の安定であるはずですが、現在の金融政策は、2%の物価目標達成が最終目標であるかのように運営され、まさに「物価目標至上主義」に陥っているように見えます。

このように日本銀行法改正時の議論やその後の歩みを振り返ることで、現在の金融政策や金融システム安定策など、日本銀行の業務全体が抱える問題点が浮かび上がってきます。本書はこうした観点から、筆者の審議委員としての5年間の経験を踏まえ執筆しました。

さらに、非伝統的金融政策の功罪についても、主要中央銀行を比較しつつ分析しています。欧州でのマイナス金利政策、米国でのかつてのイーールドカーブ・コントロールの経験などを検証することで、現在の日本の金融政策をより深く理解できるのです。最後には、中央銀行とフィンテック、中央銀行デジタル通貨などの議論も行っており、まさに本書は、現在の中央銀行の業務を考える上で、包括的かつ決定版的な内容となっています。

主要目次

- 第I部 非伝統的金融政策の評価
 - 第1章 限界に直面した非伝統的金融政策
 - 第2章 最近の非伝統的手段の検証
 - 第3章 非伝統的金融政策の系譜
 - 第4章 金融政策の新潮流
- 第II部 日本銀行の役割
 - 第5章 日本銀行法改正20年の軌跡と評価
 - 第6章 日本銀行の中核的政策の現状
 - 第7章 日本銀行のフロンティア
- 第III部 フィンテックをどうとらえるか
 - 第8章 AIの金融市場、中央銀行業務への浸透
 - 第9章 デジタル通貨の可能性

『頑張れ、日本のデジタル革命 —社長が知らないITの真相2—』

著者：楠 真 出版社：日経BP社 発行年月日：2017年12月19日



「ここが読みどころ」～筆者からのメッセージ

日経BP社のITpro!に書いている「強いITはここが違う」のコラムはおかげさまで連載100回を超えました。IT業界のいろいろな仲間たちと議論しながら、よもやま話をコラムにまとめてきましたが、それを新著として発刊することになりました。

経営とITとの対話。ずっと私にとって大きなテーマであり、NRIの現場で繰り返し自問してきたことでもあります。ところが第4次産業革命ともいわれるデジタル革命によって、NRI流のスタイルがすっかり陳腐化しつつあります。デジタル革命の中身を知るにつけ、これまで成し遂げてきたビジネスモデルのあり方に根本的な危機感を持つようになりました。

新しい時代の競争力を握るのはソフトウェアです。企業と企業をつなげるエコシステムもソフトウェア。トップ同士の握手などなくても、ソフトウェアさえあれば企業と企業がつながってしまいます。

これから私たちが本格的に相手にすることになる第三世代プラットフォーム。ここへの対応がデジタルトランスフォーメーションです。どんな落とし穴があるのか。どんなことをすれば価値創造につながるのか。私なりに考えを尽くして書き連ねたつもりです。

第一世代、第二世代を通じて日本におけるITの世界はアメリカとは少し違った日本流が定着してきました。おそらく第三世代においても日本流第三世代プラットフォームができていくに違いありません。そこへの道は日本流デジタルトランスフォーメーションです。デジタル革命の向こう側でも日本企業が輝く存在であるために、「頑張れ日本のデジタル革命」です。

主要目次

- 序章 デジタル革命で日本が危ない
- 第1章 米国発クラウド革命の正体
- 第2章 デジタル変革を阻むクラウド深谷
- 第3章 主役はソフトウェア
- 第4章 日本の「特殊な」IT業界事情
- 第5章 イノベーションの舞台裏
- 第6章 デジタル変革を生き抜く